

「大切な人が作った大切なお米」

さいたま市立与野東中学校 一年
深川 興 己

僕のじいちゃんは、米作りをしている。僕はその山口のじいちゃんが思いを込めて作ってくれたお米を赤ちゃんの頃からいただいている。お陰様で丈夫に成長できている。

この夏も僕は帰省した。緑美しい田が一面に広がっていた。猛暑の中、青い空に向かって真っ直ぐ伸びる稲穂はきらきらしていて、美しい緑色の宝物のようだった。

早朝から草刈り機の音が響いていた。じいちゃんは働き者だ。朝食前には汗びっしょりで帰ってくる。僕は、

「おはよう、じいちゃん。お疲れ様です。」
と言う。口数の少ないじいちゃんだが、僕は大好きだ。

じいちゃんのお米は一部の地域では売られている。高齢のじいちゃんは、大変な苦勞をしているだろうが、僕は遠く離れていて、何も力になることができないし、何も言えない。だけどこんなにおいしいお米なので、全国に流通したらいいなと勝手に夢見ている。

一言に米作りといっても恥ずかしながら僕は、簡単ではないということしか知らない。春に苗を育て、小さな苗を我が子のように世話をして、天候の変化や動物の襲来など厳しい自然から守り続け稲穂まで育てるのだ。

じいちゃんを始め、日本全国でお米を作っている方々のご苦勞のお陰で僕達はおいしいお米を食することができるとができる。

このような機会に改めて考えると、はっとすることがある。僕はお米が大好きなので、ついつい箸が進んでしまう。じいちゃんが心を込めて、一つ一つ大切に育てているお米。たくさんの方々の愛情がこもったお米なのだから、いくらおいしくてもよくかんでいただかないと失礼だ。お米に限らず毎日僕達の食卓においしいものを届けてくれていてる全ての方々に感謝して生活したい。

少し前に、父が精米機を買ってきた。七分づき、五分づきなどができ、味わい深いご飯をたくさんいただいている。先日は玄米ご飯を炊いた。じいちゃんのお米はうまい。僕も圧力鍋の扱いがうまくなり、水加減を目分量でできるようになった。

「じいちゃん元気？」
と僕は時々電話をする。

「米はあるか？中学はどうだ？」

と聞いてくれる。以前けがしたところが痛むのにリハビリしながら僕達のために作ってくれているのだ。僕のほうが心を配ってあげないといけないのに、じいちゃんはいつも僕を思ってくれている。遠くから。

大きな病気をせず成長できていることを当たり前と思わず、心身ともに大きくなって大切な人に恩返しできるような僕になりたいと思う。

美しい緑色の宝物の中で懸命に働くじいちゃん。秋には宝物は黄金色に姿を変えて、じいちゃんのお米が実るんだろうな。いつでも僕は目を閉じると、大切な人と大切な人のあの田んぼが思いうかぶ。